

新型コロナウイルス感染症がパンデミックとなっています。世界の感染状況をリアルタイムで確認できるジョンズ・ホプキンス大学のHPによれば、この原稿を書き始めた3月23日午前8時40分段階で332,577名が感染し、死者は14,490名となっておりますが、書き終えた24時間後の数値は感染者375,458、死者16,371名となっています。日本も油断はなりません、ことに今後は途上国での等比級数的な感染拡大が案じられます。

パンデミックな感染症被害としてよく知られているのは14世紀の欧州で流行した黒死病（ペスト）でしょう。当時のヨーロッパ人口の1/3にも及ぶ犠牲者が出ました。続く16世紀にスペイン人によってアメリカ大陸に天然痘が持ち込まれ、原住民の9割が犠牲になったと伝えられています。さらに1918年から1919年にかけて流行ったスペイン風邪では若者を中心に5000万人とも1億人とも言われる犠牲者が出たと推定されています。最近ではSARS（重症急性呼吸器症候群）やMARS（中東呼吸器症候群）の流行もありましたが、幸い日本には直接的な感染被害が及びませんでした。ということで68年間の自らの人生においても感染症がパンデミック状況を引き起こす事態を直接的に経験するのは今回が初めてのこととなりました。

SARSでは「2002年11月から2003年7月にかけて……広東省や香港を中心に8,096人が感染し、37ヶ国で774人が死亡した（致命率9.6%）」ということですが、その時に比較するとはるかに短期間であっという間に新型コロナの感染症が世界中に伝播したことに驚かされます。ことにヨーロッパ諸国には遠い中国のことという油断があったのではないのでしょうか。しかし、この20年ほどの間にグローバル化が一気に進んだことによって、人、物、金の動きが爆発的に増大し、なかでも世界の工場と化した中国のプレゼンスが圧倒的に大きくなったことと、時あたかも春節の大移動と重なって世界中にウイルスを持った中国在住者が散らされたことなどが原因と考えられます。

宮城学院でも危機管理委員会を開催し、こども園、中高、大学での修了式、卒業式、学位授与式を大幅に改め、理事会、評議員会、辞令交付式、入学式も従来とは異なる形で持ちました。今後とも教育の営みをしっかりと持続させつつ、園児、生徒、学生、院生、教職員の命と健康を守るために最善を尽くす所存です。

専門家の話を総合すると新型コロナウイルスは潜伏期間が長く、陽性反応を示す人でも本人には自覚症状がないまま周りの人々に感染させてしまうことがある、とても厄介なウイルスと言われています。地域格差も見られますが、現状では概ね無症状40%、軽症40%、重症化する人が20%。そのうち、4%程度が重篤化し、更にもその半数が死亡するというこのようです。最初は軽度の風邪症状だと楽観していると一気に重篤化し、基礎疾患を抱えた高齢者の場合には、呼吸困難に陥り命の危険にさらされてしまいます。

年齢によってリスクが異なるだけに重篤化しない可能性のある若年世代が、高齢世代の方々を慮って慎重な行動をとることがとても大切な課題となるように思われます。見えない敵との闘いは困難を極めます。いつ収束し、終息するか先行きが見通せないだけに苛立ちも募り、ストレスも溜まります。それだけに「愛は忍耐強い」（コリントの信徒への手紙I 13章7節）との御言葉に聴き入りつつ自制することが求められていると言えるでしょう。日本の現状は、幸いなことにぎりぎりのところでオーバーシュートを免れ、武漢やイタリアのような医療崩壊には進んでいませんが、なによりも「自分が病気にかからず、他人を感染させない」ということを肝に銘じて行動することも求められるのではないのでしょうか。そのことを思いめぐらすにつけ「隣人を自分のように愛しなさい」（マルコ12章21節）との主イエスの御言葉に聴き入り、自愛と他愛を一つにして振舞うことが最善の予防策となることに気づかされたことです。

人類が共同して立ち向かうべき課題に直面した今、すべての国々の為政者、ことに大国の指導者たちが、また国民が、利己的な自国第一主義に走ることなく、満足な予防や治療を受けられない途上国の方々のことを熟慮しつつ、最善の解決のための協働プログラムを、愛と知恵を尽くして冷静大胆に推し進めていくことができますようにと祈りつつ歩んでまいりましょう。